

## 『 わたしを通してでなければ 』

使徒の働き 24章 1～27節

## ◆ ユダヤ人による訴え

今朝のテキストは、ローマ総督ペリクスの元で行われたパウロの裁判の記事です。

【1節】かつてユダヤ議会において【ああ、白く塗った壁】とパウロに皮肉られた大祭司アナニヤとユダヤ教の長老たちは、弁護士テルトロを伴って来ました。演説に長けた雄弁家を連れてきたのです。この法廷は先ず、弁護士テルトロの演説から始まります。【2-4節】テルトロの発言の半分が総督ペリクスへの賞賛であり、度を越えた丁寧さです。外交辞令を丁寧に述べ、総督に好意的な印象を抱かせようとしていました。5節からパウロに対する告発の内容です。【5-9節】ここではパウロへの告発理由が三つ述べられています。

①パウロは【ペストのような存在で、世界中のユダヤ人の間に騒ぎを起こしている者】であると。まるで悪いものを伝染させる有害な男であると言うのです。注目すべきは【ユダヤ人の間に】と限定していることから、“神の民であるイスラエルの民をパウロが混乱させている”と古い選民思想に強調が置かれています。

②パウロは【ナザレ人という一派の首領】であるということ。弁護士テルトロはパウロがキリスト者の群れという異端の指導者であると表現しました。“神の律法に仕えるイスラエルから離脱した異端イエス教の指導者である”と云うことです。

③パウロは【宮さえもけがそうとしました】ということ。これはパウロが神殿に入ることが許されない異邦人を連れて入ったという意味です。実際にその事実はありませんでしたが、“罪汚れた異邦人は神殿には入れないという古い掟に縛られたユダヤ人”の姿が浮き彫りにされています。彼は告発理由を述べてもその証拠は提示できず、「総督自らがお調べになれば分かることです」と6節で言っています。一緒にいた大祭司や長老たちはテルトロを後押しして「そうさそうさ」と同調の声を上げるばかりでありました。

## ◆ パウロの弁明

【10節】パウロの語り出しもまた一瞬、総督ペリクスへの賞賛のようにも見えるのですが、総督の前で弁明できることが喜びであるということに強調があります。即ち、総督の前で明らかにしたいことがあるというパウロの想いが現れているのです。

【11-13節】パウロは先ず、【ユダヤ人の間に騒ぎを起こしている者】という点に対して弁明しました。「五旬節のためにエルサレムに戻ってから十二日しか経っておらず、その間、神殿や会堂や町の中で誰かと論争したり、争ったことはありません。そもそもその様な事実はないのだから、証拠は何一つ存在しません」と毅然と語ります。

パウロは続いて【ナザレ人という一派の首領】という点に対して弁明しました。【14-16節】パウロはここで弁護士テルトロの告発理由を認めています。但し、ユダヤ人たちは「ナザレ人という一派＝異端」と表現していますが、パウロはそれを「この道」と言い換えています。これは使徒の働きで6回用いられている言葉です。「この道」が表す意味は「イエス・キリストを信じて従う道」であるということをおぼろげに忘れてはなりません。パウロは「イエス・キリストを信じて従う道とは、イスラエルの先祖の神に仕えることであり、律法に適う事であり、預言者たちが語ってきたことと何一つ相違ないこと。そして、イエス・キリストにおいて善人も悪人も必ずよみがえりがあることを信じている」と告白しました。そして、その復活信仰のゆえに将来、神様の前に自らの裁きがあることを受け入れているからこそ【いつも、神の前にも人の前にも責められることのない良心を保つ

ように、と最善を尽くしています。(努めています)】と告白したのです。

【宮さえもけがそうとしました】という告発理由に対してもパウロは弁明しました。

【17-21節】パウロはなぜ三度目の伝道旅行をこのタイミングで終えてエルサレムに戻って来たのか事情を説明しました。【施し】とは伝道旅行で訪れた諸教会からエルサレムで困窮するキリスト者たちへの献金や捧げ物を届けるためであったことを明かしています。【供え物】とは改宗したユダヤ人クリスチャンの誤解を解くために、ナヅル人の誓願の清めの儀式の際の供え物のことを指しているのでしょうか。丁度、その清めの儀式を終えるときに神殿にいるところを、エペソから来ていたユダヤ人たちが見て騒ぎ出したのであり、その時に異邦人を伴って神殿に入っていないことは周知の事実であると弁明しました。そして21節ではユダヤ教議会で訴えられた際にも「私たちの罪の赦しのために十字架に掛かれたキリストが復活して義へと導いてくださることを証したのです」と、改めてイエス様を信じて従う自らについてパウロは大胆に弁明したのでした。

#### ◆ 総督ペリクスの対応

法廷が終了します。【22-23節】総督ペリクスは判決を下さず、パウロを監禁し続けることにしました。なぜ直ぐに判決を下さなかったのでしょうか。一つには、今回の事態の真相をより深く見極めるために、千人隊長ルシヤがカイザリヤに下ってくる際に直接報告を聞いて決めようと考えました。しかしもう一つの理由が興味深いのです。【ペリクスは、この道について相当詳しい知識を持っていた】ということです。妻ドルシラの影響が考えられます。初代教会を迫害し続けたヘロデ王の末娘ドルシラは、その真意は分かりませんが【キリスト・イエスを信じる信仰】に興味を持っていたのでした。総督夫妻の前でパウロは伝道します。【正義と節制とやがて来る審判】について解き明かしました。語るべき言葉を主は示されたのでしょうか。もともとは奴隷民族出身のペリクスは汚職により富を築いた解放奴隷の出身です。サマリヤで次官のポストを手に入れた後、総督に就任した彼は、暴力による圧政によりユダヤ地方を統治していました。正義に反する為政者、節制とは無縁であった総督夫妻に、善人であれ悪人であれ復活と共に裁きがあることをパウロは語り、悔い改めを勧めた事でしょう。ペリクスは悔い改めることが出来ませんでした。【26-27節】卑しい身分の出身であったペリクスは金の亡者のごとく、パウロが自由になるための賄賂を差し出してくることを期待していました。イエス様を信じて従う道ではなく、諸教会から献金を集めることが出来るパウロから、金をむしり取ることを考えていたのです。結局、総督ペリクスは退任するまでの二年間、パウロを幽閉し続けました。

#### ◆ まとめ・お勧め

イエス様は言われました。【わたしが道であり、真理であり、いのちなのです。わたしを通してでなければ、だれひとり父のもとに来ることはありません】罪人と真の神様との生きた交わりの回復は、イエス・キリストを信じて従う道以外にはありません。イエス様が道であり、真理であり、いのちなのです。ユダヤ人たちはナザレ人イエス様を排除して、律法と神殿を形式的に重んじることで神の救い(選び)の民であろうとしました。総督夫妻もまたパウロが語るイエス様の前に悔い改めて真の神様との交わりに入ることを求めはしませんでした。「この道」とはイエス様を信じて従う道です。パウロはイエス様の十字架と復活による信仰によイエス様の十字架と復活こそが、救いの道であり、真理に至る道であり、いのちに至る道であると弁明=証しました。

今、イエス様を私たちの唯一の救い主として信じる時としたいのです。そしてイエス様を信じて従う私たちは、ただただ、イエス・キリストの十字架と復活を告げ知らせて行きたいのです。